

私の半生

才能教育研究会会長

鈴木 裕子 ③

小学校

木曾福島町での生活に私はすぐ慣れた。お手伝いのばあちゃん、ちいちゃん、おこうちゃんも一緒だったので東京での生活とあまり違和感はなかった。

父は山林学校から、木曾福島町八沢の小松製材所の遊休施設を借り受けて、けたの製造を行うようになった。

は工場を国用製糸工場に移し、昭和23年から本来の楽器工場に復帰した。社名も「鈴木ウアイオリン楽器」と変更し、最初にウクレレ、そしてバイオリンの製作を開始した。

その間、私は昭和21



2年生の時、音楽院の友達と。本人右

と伯父や父たちが話していた。

その後、豊田耕児さんは伯父の家に同居するようになった。私は耕児さんのことを、長い間親戚のお兄さんだ

と思っていた。その頃から「耕ちゃん」「ひろこ」と呼びあっていた。

木曾福島小学校では、1年から3年までの担任は大竹佑子先生だった。優しい先生で生徒から慕われていた。

昭和23年に才能教育研究会と改称された。こうして伯父は、松本で多くの子どもたちにバイオリンを教えることになり、耕ちゃん、ひな子叔母一家とともに木曾福島を引越して行った。そのため私は松本までレッスンに通わなければならなくなった。

松本までレッスンに通う

私がバイオリンのレッスンを受けていることにとっても理解があり、レッスンのために早引けしてものがめることなく、温かく見守ってくれた。特に駆けっこは得意で、リレーの選手にもなった。ドッジボールも体育の時間にやったが、私はすばしこくボールを避けた。

（聞き書き・佐藤文字 俳人）

退して母と松本まで出かけた。当時、木曾福島小学校は、学年ごとに4クラスあり、各クラスは50人もいて、1学年に200人もいた。ガラスは「い、ろ、は、に」という組に分かれ、私は「に」組だった。

勉強も好きだったが、体育も好きだった。やがて伯父は、昭和21年、松本市に松本音楽院を開

て全国幼児教育同志会を発足させ、2年後の